本能寺蔵『落葉百韻』訳注（六）付．考察及び式目表

伊藤伸江・奥田勲

本稿は、京都の古刹本能寺が蔵する『落葉百韻』の訳注（六）と、考察及び式目表からなる。注釈は、「『落葉百韻』訳注（一）」から「『落葉百韻』訳注（五）」までと同じく伊藤が下原稿を作成し、奥田とのメール会議及び複数回の対面会議で意見交換、討議を行ない、その結果を完成原稿にまとめている。なお、この研究は科研費基盤研究（C）「心敬の文学作品における創造と新撰菟玖波文学圏への影響についての総合的研究」（研究代表者伊藤、研究分担者奥田）により行なっているものである。

凡　例

一、底本は本能寺蔵某年十月二十五日賦何人百韻（『落葉百韻』）である。該本は他に写本の存在を聞かない孤本であるため対校本はない。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記にあらためて清濁を付した。原文は百韻の翻刻に示してあり、適宜参照されたい。原文の表記の誤りと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が括弧書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いている。校注者による改訂部分のうち、特記すべきものは、注釈内に付記した。

一、各句には、百韻全体の通し番号を句頭に示し、参考として、各懐紙内でのその句の所在を懐紙の順、表と裏の別、表裏ごとの句の

番号で表し、前句を添えた。

一、語釈にあげる和歌、連歌例は、後述引用文献に依る。百韻の読解に有効な際には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。私に清濁を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改めた。

一、各句には、【式目】【作者】【語釈】【現代語訳】の説明項目を設けると共に、二句一連の連歌の中で句がどのように作用するか、及び独立した一句ではどんな意味を持つかに配慮し【現代語訳】の他に【付合】【一句立】の項目を設けた。さらに必要な場合には【考察】【補説】【他出文献】の項目も設けた。

（名残折　裏　一）　一人ある身のあし火たく影

九三　わづかなる栖をなどか憑むらむ　　円秀

【式目】雑　栖（居所・体）栖已上居所に嫌之（可嫌打越物）

【作者】円秀

【語釈】●わづかなる　みすぼらしい。「難波人葦火焚く屋のすしてあれど己が妻こそ常めづらしき」（万葉集・二六五一、拾遺集恋四の八八七番に柿本人麻呂詠として入る。第三句「すすたれど」第五句「とこめづらなれ」）。「よく方もがな老の来る道／わづかなる家のすまひは門一つ」（宝徳四年千句第七百韻・七八／七九・超心／日晟）。●憑む　頼りにする。「誰なれば古き栖をたのむらん／心は老が身にな宿りそ」（竹林抄・雑下・一三七六・心敬）。

【付合】葦火を焚く栖を、万葉集二六五一（拾遺集八八七）から、みすぼらしいと表現した。また、付句で水辺から居所へと句境を転換している。「水辺のゝき所、葦火」（連珠合璧集）。

【一句立】とるにたらないみすぼらしい住居をどうしてそんなふうに頼みに思っているのか。

【現代語訳】（前句　一人きりで葦火を焚いている姿が見えることだ。）葦火を焚かねばならないような、とるにたらないみすぼらしい住居をどうして頼みに思っているのか。

（名残折　裏　二）　わづかなる栖をなどか憑むらむ

九四　軒の木末に巣をかくる鳥　　三位

【式目】春（巣をかくる鳥）　軒（居所・体・一座二句物（肖柏追加））梢只一、花とも松とも云かへて一（一座二句物・肖柏追加）　鳥巣春也、水鳥巣夏也、鷹巣も夏也、鶴巣は雑也（可分別物・新式今案）

【作者】三位

【語釈】●軒の木末　軒端にある梢。「遠き山かと思ふむら雲／軒に見し梢も暮るる雨の日に」（竹林抄・雑上・一一二四・心敬）。●巣をかくる鳥　巣を掛ける鳥。「巣」は歌語ではない。「浅からずいか

なるえにか契らん／茂る林に巣をかくる鳥」（熊野千句第一百韻・八三／八四・元説／宗怡）。

【付合】前句の栖を鳥の巣と解いた付合。「栖」から「軒」へと居所でつなぐ。

【一句立】軒端の梢に巣を作る鳥。

【現代語訳】（前句　ちっぽけでみすぼらしい栖をなぜそんなふうにたのみにしているのだろう。）軒端の梢に巣を作る鳥よ。

（名残折　裏　三）　軒の木末に巣をかくる鳥

九五　開花も去年や忘れぬ山桜　　利在

【式目】花（春）　今年に去年（可嫌打越物・新式今案）　桜只一、山桜、遅桜など云て一、紅葉一（一座三句物）

【作者】利在

【語釈】●開花も　巣をつくる鳥同様、咲く花も。●去年　美しく咲いていた昨年。「遅くとき時をば言はず山桜去年の盛りに花を待つかな」（嘉元百首・花・一一〇八・小倉実教）。

【付合】春の花鳥のイメージを利用し、前句の「鳥」から「花」に移る。「花は根に鳥は古巣に帰るなり春のとまりを知る人ぞなき」（千載集・春下・一二二一・崇徳院）を念頭に置くが、付合は、春の初めの頃の情景である。春が来て、鳥は昨年と同じ場所に巣を作りはじめたと前句の意を読み取り、では、花よお前はどうか、美しく咲いた去年を忘れずに今年も咲いてくれるかと、開花が遅く、まだ咲いていない山桜に詠みかける。

【一句立】毎年同じ所で咲く花のはずだけれども、花よ、お前も、去年を忘れてはいないか（今年も去年のように咲くか）、山桜よ。

【現代語訳】（前句　軒端の梢には、鳥が去年を忘れずに再びやってきて巣をかけている。）毎年同じ所に巣を作る鳥と同様、毎年同じ所で咲くはずの花も、去年を忘れないで咲いているか、山桜よ。

（名残折　裏　四）　開花も去年や忘れぬ山桜

九六　霞をこゆる風の静けさ　　伝芳

【式目】春（霞）　霞（聳物・可隔三句物）　風（吹物）

【作者】伝芳

【語釈】●霞をこゆる　霞を越える。和歌、連歌にも非常に珍しい表現で、「風」が霞をこえるという言い方は見あたらない。「信濃路や御坂を登る旅人は霞を越ゆるものにぞありける」（林葉集・春・四一）。「霞トアラバ、風」（連珠合璧集）。●風の静けさ　風の静かなさま。「吉野川ただ花のみや流るらむ／霞の内の風の静けさ」（難波田千句第四百韻・八三／八四・兼載）。

【付合】「花」に「霞」、「風」をつけた。風が霞を乱さないので、霞

の向こうに山桜が咲いているかどうかはわからないのである。「花の色は霞にこめて見せずとも香をだに盗め春の山風」（古今集・春上・九一・良岑宗貞）。

【一句立】たちこめた霞をこえる風の穏やかなさまよ。

【現代語訳】（前句　毎年、同じ所に咲く花も、去年を忘れずに咲いているだろうか、山桜よ。霞がたちこめていて、花が見えないのだ。）そして、風も穏やかで、たちこめた霞を乱すことなく越えてくる、そんなありさまよ。

（名残折　裏　五）　霞をこゆる風の静けさ

九七　うちいづる浪に氷のひま見えて　　隆蓮

【式目】春（氷のひま）　浪（水辺・用）　氷只一、つらゝ一、月の氷、涙の氷などに一、霜雪のこほるなどに一（水辺・用（『梅春抄』）、一座四句物）

【作者】隆蓮

【語釈】●うちいづる浪　湧き出る浪。本歌「谷風にとくる氷のひまごとにうちいづる浪や春の初花」（古今集・春上・一二・源当純）。●ひま　すきま。割れ目。「うちいづる氷のひまのみづや河春日長閑に波や立つらん」（夫木和歌抄・文応元年七社百首、春日・一二五三・藤原為家）。

【付合】前句の「霞」から付句「ひま」を、また「こゆる」から「浪」を縁で呼び込んだ。

【一句立】ほとばしり出てくる浪によって氷の割れ目ができていることがわかる。

【現代語訳】（前句　霞を越えてくる風の静かなことよ。）ほとばしり出る浪によって、暖かくなって今まで水面を閉ざしていた氷に割れ目ができたことがわかって。

（名残折　裏　六）　うちいづる浪に氷のひま見えて

九八　われてもくだる朝川の月　　忠英

【式目】月（秋）　朝月（一座一句物）　川（水辺・体（『梅春抄』））

【作者】忠英

【語釈】●われてもくだる　河の流れが分かれて流れ落ちる。また、月が欠けることを「われても」に掛ける。「瀬を早み岩にせかるる滝川のわれても末にあはむとぞ思ふ」（詞花集・恋上・二二九・崇徳院）。「よひのまにいでて入りぬる三日月のわれて物思ふ頃にもあるかな」（古今集・雑体・一〇五九・詠み人しらず）。また、川面に映る月影が水流が激しいため割れたように見える、というニュアンスも感じられる。「なかば過ぎ行く春の悲しさ／朝な朝な割れて霞める夜半の月」（竹林抄・春・六六・心敬）。●朝川　朝の川。「浅川」を掛け

ているか。万葉集に長歌「〜ももしきの　大宮人は　船並めて　朝川渡り　船競ひ　夕川渡る〜」（巻一・三六・吉野宮に幸せる時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌（『拾遺集』にも再録）、「人言を繁み言痛み己が世にいまだ渡らぬ朝川渡る」（万葉集・巻二・一一六・但馬皇女）、その他一例があり、いわゆる万葉詞である。『六百番歌合』で「山里は朝川渡る駒の音に瀬々の氷の程を知るかな」（冬朝・五四一・顕昭）と顕昭が使用し、『八雲御抄』巻三枝葉部に載る。今川了俊が正徹に与えた『言塵集』にも「河」の項目に「朝川　夕川　夜川　ひる川」とある。正徹が好んで使用した語。「釣する袖のひたす朝川／さしのぼる小舟は棹も短きに」（熊野千句第四百韻・六〇／六一・心敬／盛長）、「根芹つみつつかへるさの道／あさ川の霞をあらふ波こえて」（心玉集・春・九二八／九二九）。なお、「朝川」については『寛正六年正月十六日何人百韻』の注釈の際、第六七句注にて考察している。

【付合】前句の「氷」から「朝川」を連想する。「山里は朝川渡る駒の音に瀬々の氷の程を知るかな」（六百番歌合・冬朝・五四一・顕昭）。「岩間より出湯と見るや朝川のこほれる水の煙なるらん」（草根集・冬地儀・九二一四・康正元年十二月十六日詠）。付合では、まだ氷がはりつめていない、寒い秋の朝の川の情景となる。

【一句立】二つの流れに分かれて下っていく朝の川、そこにまだ残って映っている欠けた月よ。

【現代語訳】（前句　ほとばしり出てくる浪によって氷の割れ目ができていることがわかる。）二つの流れに分かれて下っていく朝の川、そこにまだ残って映っている欠けた月よ。

（名残折　裏　七）　われてもくだる朝川の月

九九　秋をへむ君が宮木の数々に　　心敬

【式目】秋

【作者】心敬

【語釈】●秋をへむ　秋を送る。和歌、連歌共にこの句しか管見に入らない珍しい表現。普通は「秋を経て」とし、歳月が過ぎ行く事を表現する。「秋をへて遠ざかりゆくいにしへを同じ影なる月に恋ひつつ」（続拾遺集・秋下・三一七・藤原為家）。ここは、「幾秋を経む」の意味で、長く続く未来の時を推量し、祝意を引き出し、挙句へとつなぐ。●宮木　神社や宮殿を造営するための材木を表わす祝意の語。泉の杣山から切り出す。「泉の杣繁き宮木は引くとも絶ゆべからず」（新古今集仮名序）。または、神社や宮殿の庭に生える木々。管見では同時代の連歌で忍誓に二例、心敬自身に一例あり、心敬の句は神社の木々を言う。「心の綱やおもひたゆまん／長き日に今日は宮木を引くらし」（宝徳四年千句第五百韻・四六／四七・賢盛／忍

誓）。「心ひく月の宮木は杣もなし／まがきの露ににほふよもぎふ」（小鴨千句第三百韻・発句／脇・忍誓／日晟）。「うさをのこせる心みえけり／古はへる神の宮木に鳩のゐて」（芝草内連歌合（松平文庫本）・一九九）。●数々に　多数。数多く。「数々にながめし人の哀れをも忘ればつらし古き世の月」（心敬集・応仁二年百首・月・二三三）。

【付合】「くだる」に「宮木」を付ける。「くだる」は、宮木が山から切り出され、川を流されて下っていくことをいう。「杣人のくだす宮木も泉川霞みながらぞ春は流るる」（夫木抄・九〇一七・いづみのそま・藤原家隆）と、泉の杣山の木を切り出して川を流して運ぶ光景を詠む歌があり、正徹にも「朝ごとに大内山の宮木をや春の霞もつなで引くらむ」（草根集・九三二五・康正二年三月十二日詠）との山から木を切り出す詠がある。一句では、宮を神仏や霊力あるものの屋とし、本能寺の庭の樹木と解した。

【一句立】これから先、幾秋も栄えていくであろうあなたの宮、この本能寺の庭には樹木が多く生え繁栄の極みだ。

【現代語訳】（前句　分かれ流れて下って行く朝の川に、まだ映っている欠けた月。）そんな川を、幾秋を送るであろうわが君の宮を造る材木が、流れにそって数多く下っていく。

【考察】第九九句は、客人から亭主への祝意をこめた呼びかけとなるゆえ、心敬は「宮木」で本能寺の庭園の樹木を表現し、挙句を詠むはずの日明に対して、おそらく眼前の光景であろうその庭園の樹木の数多さをたたえた句を投げかけた。この百韻は、本能寺の庭園にある井戸に、落葉のたまる情景を詠む発句、古くからある庭を吹き過ぎる松風を詠む脇から展開してきたが、その流れは、九九句にいたり、心敬の巧みなさばきによってまた本能寺の庭の光景に戻り、寺の今後の繁栄を予想し讃える挙句につながっていく。

（名残折　裏　八）　秋をへむ君が宮木の数々に

一〇〇　うてなの露の玉みがく色　　日明

【式目】露（秋）露（降物・可隔三句物）　玉字似物竝褒美詞等在此中（一座四句物）

【作者】日明

【語釈】●うてな　高殿。また、極楽に往生した者が座る蓮の花の形をした蓮台。「うてなの蓮花ひらけぬる／夏草の中にも露の玉散りて」（紫野千句第四百韻・八二／八三・盛理／相阿）。●玉みがく　玉を磨くように立派に美しくする。

【付合】「秋」に「露」を付け、祝言の意へと導く。また、前句の「宮木の」の部分、「宮城野」を意識させるゆえに、「露」が呼びこまれたこともあるかもしれない。例えば第九九句の例に挙げた小鴨千句

第三百韻の脇（日晟）は、小松天満宮本では「まがきの露」であるが、静嘉堂文庫連歌集書本、陽明文庫本、天満宮文庫滋岡長松本では、「真萩の露」である。

【一句立】極楽の蓮台に置いた露が、玉をみがいたような美しい色であることよ。

【現代語訳】（前句　これから先、幾秋も栄えていくであろうあなたの宮、この本能寺を造る材木が数多くあり。）その材木によってつくられるであろうこの本能寺の高殿に置いた露は、極楽の蓮台に置いた露が玉をみがいたような美しい色を添えているのにも似て、非常に美しいのである。

【考察】亭主による第九九句の返答となる挙句。今後末永く栄えるはずの本能寺の高殿の新築を祝う句であろうか。極楽の蓮台のイメージを重ねることにより、本能寺の宗教的な格の高さをも表わしている。

引用文献典拠一覧

式目の引用は京大本『連歌初学抄』（『京都大学藏貴重連歌資料集1』（平成一三・臨川書店）による。

『連歌新式追加並新式今案等』を参考として挙げる場合には、木藤才蔵『連歌新式の研究』（平成一一・三弥井書店）所収太宰府天満宮文庫本によった。

【語釈】等における和歌・漢詩句の引用は断らない限り『新編国歌大観』による。『草根集』は日次本（『私家集大成五』（昭和四九・明治書院）所収書陵部蔵御所本）を使用し、詠歌年時がわかる場合には付記した。歌の理解に必要な場合には、『新編国歌大観第八巻』所収の類題本（ノートルダム清心女子大本）の表現も付記している。また、万葉集の歌番号は西本願寺本の番号によった。連歌等の引用は、以下に示す諸本による。

連珠合璧集…『中世の文学連歌論集一』（昭和六〇・三弥井書店）

連歌寄合…『連歌寄合集と研究（上）』（昭和五三・未刊国文資料刊行会）所収祐徳稲荷神社蔵中川文庫本

産衣…『連歌法式綱要』（昭和一一・岩波書店）

菟玖波集…金子金治郎『菟玖波集の研究』（昭和六〇・風間書房）

竹林抄…新日本古典文学大系『竹林抄』（平成三・岩波書店）所収厳島神社宮司野坂元良氏蔵本

紫野千句…古典文庫『千句連歌集一』（昭和五三）所収静嘉堂文庫蔵本

文安雪千句…古典文庫『千句連歌集二』（昭和五五）所収静嘉堂文庫蔵本

顕証院会千句…古典文庫『千句連歌集二』（昭和五五）所収内閣文庫
蔵本
宝徳四年千句…古典文庫『千句連歌集三』（昭和五六）所収城崎温泉
寺蔵本
小鴨千句…古典文庫『千句連歌集三』（昭和五六）所収小松天満宮本
表佐千句…古典文庫『千句連歌集四』（昭和五七）所収大東急記念文
庫本
熊野千句…古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収静嘉堂文庫本
河越千句…古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収内閣文庫蔵本
葉守千句…古典文庫『千句連歌集六』（昭和六〇）所収北野天満宮文
庫蔵本
永原千句…古典文庫『千句連歌集七』（昭和六〇）所収菅原神社蔵本
石山四吟千句…石山寺蔵本（『石山千句』（文学第二部四））
成立不詳心敬以前「したみづに」朝何百韻…日文研連歌データベー
ス所収天理図書館綿屋文庫本
寛正四年六月廿三日唐何百韻…貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭
和四七・角川書店）所収太田武夫氏本
文安四年五月廿九日何船百韻…貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭
和四七・角川書店）所収高野山大学附属図書館本
寛正六年正月十六日何人百韻…伊藤伸江・奥田勲「大阪天満宮文庫
蔵長松本寛正六年正月十六日何人百韻訳注（一）（平成二一・『愛
知県立大学国際文化研究科論集』第十一号）所収天満宮文庫長
松本
寛正六年十二月十四日何船百韻…貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』
（昭和四七・角川書店）所収野坂元定氏本
延徳二年九月二十日山何百韻…日文研連歌データベース所収大阪天
満宮文庫本
年次不詳何船百韻「散しえぬ」…貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』
（昭和四七・角川書店）所収野坂元定氏本
年次不詳何路百韻「白妙の」…貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭
和四七・角川書店）所収天満宮文庫本
親当句集…貴重古典籍叢刊十一『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角
川書店）所収赤木文庫蔵本
宗砌句集…貴重古典籍叢刊十一『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角
川書店）所収大阪天満宮文庫本
行助句集…貴重古典籍叢刊十一『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角
川書店）所収大阪天満宮蔵本
吾妻辺云捨…貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）
所収天理図書館本
心玉集・心玉集拾遺…貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭和四七・

角川書店）所収静嘉堂文庫本
連歌百句付…貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）所収天理図書館本
心敬僧都百句…貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）所収岩瀬文庫本
芝草句内岩橋…『連歌貴重文献集成第五集』（昭和五四・勉誠社）所収本能寺本
心敬句集苔筵…貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）所収赤木文庫本
園塵第四…『伊地知鐵男著作集二〈連歌・連歌史〉』（平成八・汲古書院）所収早稲田大学本
難波田千句…日文研連歌データベース所収本
私用抄…『連歌論集三』（昭和六〇・三弥井書店）所収京大附属図書館蔵本
法眼専順連謌…貴重古典籍叢刊十一『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角川書店）所収赤木文庫本
連歌詞…湯浅清『心敬の研究』（昭和五二・風間書房）所収国会図書館本
袖中抄…『歌論歌学集成第五巻』（平成一二・三弥井書店）所収高松宮本

参考文献

黒田日出男「中世の「畠」と「畑」」（『日本中世開発史の研究』（昭和五九・校倉書房）所収）
野本寛一『焼畑民族文化論』（昭和五九・雄山閣）
松岡心平「西行の「ふるはた」の歌」（平成元・日本古典文学会会報No. 115）
岩佐美代子「「春かけて」考―中世同種表現詠の解釈に及ぶ―」（平成一四・和歌文学研究第八十四号）

百韻における宗匠心敬

『落葉百韻』の連衆十五人（発句のみを与えたと思われる一条兼良を除けば、連歌の場に会したのは十四人）は、この百韻の訳注（一）において考察したように、[注1] 心敬の和歌の師正徹と関係の深い畠山氏の被官の武士たちや僧の集まりであろうとみなせる。連衆のうちには、心敬以外に連歌師はおらず、心敬の指導が強くゆきわたる場であった。この場において、連歌はどのように進行し、宗匠心敬はどのように百韻を導いていたか。考察の便宜のため、句の進行に重要な項目を抽出した式目表を作成し、心敬の他に有力連歌師の参加した『寛正六年正月十六日何人百韻』も参照しながら、心敬の句さば

きの特徴を考えたい。

まず、式目表から、『落葉百韻』の流れを概観する。発句の後、連衆十四人が一巡した後は、順を追うことなく出句されるが、代表的な景物である花と月との詠まれ方を見ると、花が三句、月が九句詠まれている。花は応安新式で「一座三句物」と規定されており、この百韻でも三句で問題はない。月は「月」そのものでは式目に数の規定がなく、幾つでも詠みこめるものであるが、『応安新式』で、個別規定として「春月」「夏月」「冬月」が「一座二句物」とされている。それに対し、この百韻内では、月が七、春月一、冬月一であり、秋季以外の月がやや少ない。だが、心敬が参加する『寛正六年正月十六日何人百韻』では、月八（うち似物月一）、春月一、その他『寛正七年二月四日何人百韻』では、月が八、春月一であるように、同時期の百韻の中で特に偏っているというわけではなく、他の季節の月よりは秋の月の方が詠みこみやすいからこうなったのであろう。[注2]

また、連衆それぞれの出句数は、宗匠の心敬が一四句、伝芳一〇句、隆蓮九句、利在九句、毘親八句、三位七句、有実七句、円秀七句、忠英六句、立承六句、貞興六句、日明五句、正頼四句であった。連衆に関しては出自未詳の者も多く、力量等がよくわからない場合も多いが、花と月の詠者を見ると、花の詠者は、日明（第三九句）、心敬（第五七句）、利在（第九五句）である。亭主日明の花の詠は、まさに主催者に花を持たせて詠ませたというわけであろう。月の詠者も、只の月が、隆蓮（第五句）、利在（第一七句）、毘親（第四四句、第八九句）、有実（第六二句）、伝芳（第七二句）、忠英（第九八句）の六名、春の月が心敬（第八〇句）、冬の月が利在（第五三句）である。これを見ると、総句数の多い連衆からほぼ順当に月を詠んでいるようであり、中で利在は花のみならず、月も二句詠んでおり、月を二句詠む毘親と並び、連衆の中では力量を評価されていたものであろうと推測できる。

さて、『落葉百韻』では、宗匠心敬は、第三、第一六句、第二三句、第三二、第三七句、第四六句、第五一句、第五七句、第六六句、第七〇句、第八〇句、第八三句、第九一句、第九九句の十四句を詠み入れている。貴人兼良の発句、亭主日明の脇に続き第三に入り、一巡の後（第一六句）に改めて先鞭を付けて入る振舞いや、挙句の一つ前（第九九句）に入る振舞いは宗匠として当然であるが、その他の句を見ても、二折表第一句（二三句）、二折裏第一句（第三七句）、三折表第一句（第五一句）、三折裏第二句（第六六句）、名残折表第二句（第八〇句）と、各折の始めや終わりには必ず句を詠み入れている。三折裏第二句、名残折表第二句などは、それぞれ利在、立承に句を譲り、進行を支えるために次の句に入ったと思われ、連歌熟練の徒のいないこの百韻の基本の形としては、各折の表裏最初の句

は宗匠心敬が作句することが予定され、その都度体勢を整えての再出発が図られていたことがわかる。宗匠が各折表裏の最初、末尾の句を詠み、百韻を支えるのが、連衆の未熟さゆえはっきりと見てとれるのであり、この点は、心敬以外に年長の連歌師行助、専順が顔をそろえ、専順弟子宗祇も参加を許された『寛正六年正月十六日何人百韻』（式目表参照）が、必ずしも宗匠心敬が各折表裏始め終わりに入る形では進行していないこと、しかし子細に見れば、行助、専順という先輩格の連歌師がその役割を分担しつつ百韻が進行する形になっていることからも、得心が行く。『寛正六年正月十六日何人百韻』では、心敬は発句、一巡後の最初の句、挙句の一つ前の句を詠み、二折裏第一句、三折表末尾の句、名残折第一句に入るが、行助は、三折裏第一句、名残折表末尾の句に入り、専順は、一折裏末尾の句、名残折裏第一句を詠む。行助は、第三と挙句も詠んでおり、心敬が行助に譲る所が多く、専順にも配慮しているのである。『落葉百韻』にはこうした実力派の連歌師がいない分、はっきりと心敬の独擅場であることがわかろう。

また、宗匠は、その熟達した技巧ゆえに、句の流れの重要な位置で句を詠み入れ、行様を決めるはずであり、心敬も第三二、三七、五七、六六、九一句と詠み入れることにより、句境を変化させ、百韻の流れの舵取りをしている。また心敬は句境が変化する直前の句（第四六句、第五一句、第七〇句）も詠んでおり、その中に多くの素材を詠み入れ、連衆が心敬の句によって句移りをスムーズになせるように助けに入ってもいる。心敬は折の変わり目と句境の変わり目に登場し、連衆を強力に導いているのであった。

続いて、心敬の細かな句さばきとして、季の句の連続と、体用に関して見られる特徴をいくらか挙げておく。

『落葉百韻』は、某年十月二十五日の張行ゆえに、冬の季から始まる。その後に四季・雑の句が詠み重ねられて行くが、その中で、例えば八三句は、八〇句で心敬がはじめた春の句が三句続いた後、あえて心敬がまた入り、雑へと句境を変化させている。式目の規定では春の句は五句まで続けることが可能なのであるが、こうした句さばきは、実は春の句があまり長く続くのを避けるという宗匠としての考えによると思われる。

心敬の式目に関する意見が述べられた伝書には、『私用抄』『心敬法印庭訓』等がある。このうち、例えば、『私用抄』[注3]では、

一、春秋を面に五句めまで沙汰候。春の句などの五句めまで侍れば、ことのほかくたびれたる句ども見え侍て、恥ぢがましく哉。春句はあたたかにて付けにくき物歟。三句めまでなれば、うらの季もはやく移りてあそばしよく侍る歟。

と述べられている。また、『心敬法印庭訓』[注4]にも、

一、花の連歌のほかに、よしもなき所にて、春をとり出だすことなかれ。春の季すくなき物也。秋はなにとなく淋しきものにて、よき道具春よりはいますこしおほし。すべて、春はあたたかなる也。もろこしには春をほめたりといへども、もつぱら詩にも秋冬を作れり。瀟湘の八景の題に春のなきにて、おほかた心得べし。

とある。『落葉百韻』での心敬は、秋の句が四句つづいたあとに入る三七句、同じく秋が五句続いた後に入る九一句のふるまいと比較して、春は早めに止めているのである。また、『寛正六年正月十六日何人百韻』においても、春の句の連続は、発句から第五句まで五句連続一回の外は、三句または四句の連続（各二回）であり、秋の句の連続は四句または五句の連続（四句四回、五句三回）であるのと比較して短い。この時、心敬は、例えば第七三句で秋の五句目を詠む。また、第八六句では八五句（大況）が秋の五句目を詠んだのに続いて入り、雑に句境を変えている。このあたりは秋をぎりぎりまで続ける形をとらせているということができるし、第六四句でも、秋の句が四句続くまで待ち、雑に変えている。これに対し、春の句の連続は、心敬が特に句を詠みいれずとも短く終わっている。このように、秋の句と比較した場合、春の句の連続は短く止められていた。連歌の原則からは、常に句境が移り変わるのが望ましく、心敬はむしろ秋の句に関して、三句で止めず、自らの作句意識にてらしてより長く続けることを許したというべきであろう。

また、体用に関する規定との関係で目を引く特徴として、体と用の言葉を同一の句に詠みこんだ事例が見られることがある。

『落葉百韻』では、山類の体用で、第五〇句の「やすきかたなきそはのかけはし」（貞興）に「岨」と「かけはし」が同時に見られる。『応安新式』では「そは」は山類の体、「梯」は山類の用であった。後の『梅春抄』[注5]においても、「山類の体　～岨」「山類用。～梯」とあり、この規定はずっと変わっていない。だが、「そはのかけはし」は、『落葉百韻』とほぼ同時期の『熊野千句』[注6]にも「古畑つくる木曽の山里／五月雨に岨の梯朽ちそひぬ」（熊野千句第四百韻・八八／八九・鶴丸／宗怡）と詠みこまれ、「朽ちてあやうき岨の梯／旅人も駒引きかへす深山路に（心敬）」（連歌百句付）[注7]と、心敬自身の句の前句にもみられる。「そは」と「かけはし」とは一体として考えられ、意味の上では「かけはし」に重点が置かれるから、梯と同様のものとして心敬は受け入れていたのであろうか。

水辺の体用に関しては、享徳元年（一四五二）、『新式今案』により改訂された「舟」の規定が使われている。『応安新式』では、「湊」は水辺の体、「舟」は水辺の用であったのが、『新式今案』では「舟」が体用之外となり、「湊」と「舟」とを同一の句の中で使っても、体

と用がかちあうことがなくなり、明らかに句作が自由になった。第九一句「さ夜ふかき湊の舟に人はねて」（心敬）はその規定を利用した句である。『寛正六年正月十六日何人百韻』でも、同様に水辺の体の事物と「舟」を同時に詠みこんだ例として第二五句「浦づたひゆくゆく舟の遠ざかり」（実中）、第五五句「風まぜに長雨ふる江の泊り舟」（宗祇）、第六七句「舟遠き春の朝川日のさして」（宗祇）の三句があり、舟を詠み込めることで、表現できる水辺の情景がより豊かになっている。

しかし、同じく『新式今案』で定められた「波」の規定は、『寛正六年正月十六日何人百韻』では、用いられていない。即ち、『寛正六年正月十六日何人百韻』には、第三二句「湊を深み波ぞ荒れぬる」（幸綱）、第三三句「五月雨を満つ汐なれや比良の海」（心敬）、第五六句「みぎはの松は浪にうかべる」（大況）、第八六句「袖の浦わによする夕浪」（心敬）があり、『応安新式』で水辺の用と規定され、『新式今案』でも用とされている「波」「汐」を水辺の体の事物と共に詠みこんでいる。これらの句に見られる「波」「汐」に関しては、後に『心敬法印庭訓』にも

海・浦などといふ句に、水辺の物にて、しかも体にても用にてもなき、舟・橋・蘆・あまなどやうの物の付たるに、今度用はよきとて、波・塩・水などしたる、などやらむ心よからず、中と絶えたるやう也。

と述べる際に、用の例としてのっていた。また『梅春抄』でも水辺の用には「波」があげられ、以後も体用之外となった様子はない。式目を見ると、『応安新式』の水辺の用の規定と、『新式今案』の水辺の用の規定では、次のように変化している。

応安新式

浮木　舟　流　浪　水　氷　水鳥類　蝦　千鳥　葦　蓮　真薦
海松　和布　藻塩草　海　人　塩　塩屋　塩干　萍　閼伽結
魚　網　釣垂　懸樋　氷室　下樋　手洗水已上如此類水辺用之

新式今案

浪　水　氷　塩水辺之用也　浮木　船　流　塩焼等　水辺躰用之外也

以上新式中両所詞有相違、得其意可分別也

『新式今案』で、浪、水、氷、塩の四項目のみを用と規定し、浮木、船、流、塩焼等は体用の外と規定するのは、『応安新式』の項目のうち、浪以下の四項目以外の項目は体用の外でよいとする考えであり、[注8]さらに迷う場合は意味を考えて判断せよとの但し書きもついている。『新式今案』は、句の文学的な解釈に従って体用のしばりをゆるやかなものにしており、これが既に宗砌が宗匠であった時代（文安五年（一四四八）～享徳三年（一四五四））の風潮であったことが

わかる。そして、『落葉百韻』等を見る限り、心敬やその周辺の連歌師たちは、『新式今案』制定後に一段と、語句の体用の別に関する制限をゆるめていったのではないか。そして、水辺の事物を入れた句の多い『寛正六年正月十六日何人百韻』の頃には、「波」や「汐」を暗黙のうちに体用の外として扱っていたか。[注9] この百韻は心敬以外に七賢の中から複数の作家が入っている百韻であり、その張行の場での句作は、百韻の行様において情景の移り変わりを巧みに進めていくために水辺の句を多く使うものであった。さらに、詠まれた水辺の句を一層文学的な描写の持つ句に磨きあげようとするならば、体用の制限をもっとゆるくすることが必要であり、「波」や「汐」を体用の外とすれば、一句中に水辺の景物を重ねて詠みこみやすく、水辺の描写が詳細になる。心敬が指導力を発揮できるような私的な連歌会や、志を同じくする連歌師との連歌ゆえに、句作の指向が式目の運用の仕方に現れたのであろう。

注

1　「本能寺蔵『落葉百韻』訳注（一）付.『落葉百韻』翻刻及び解説（『落葉百韻』について）」（『愛知県立大学日本文化論集国語国文学科編』第一号・平成二三・三）

2　例えば、秋の句は、『寛正六年正月十六日何人百韻』では三二句、近い時期の百韻として参考に供した『寛正七年二月四日何人百韻』では二九句ある（新潮日本古典集成連歌集頭注（島津忠夫氏）に従う）。

3　引用は『連歌論集三』（昭和六〇・三弥井書店）所収京大附属図書館本による。

4　引用は『連歌論集三』（昭和六〇・三弥井書店）所収太田武夫氏蔵本による。

5　引用は『連歌論集四』（平成二・三弥井書店）所収木藤才蔵氏蔵本による。

6　引用は古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収静嘉堂文庫本による。

7　引用は貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）所収天理図書館本による。

8　木藤才蔵『連歌新式の研究』（平成一一・三弥井書店）第三章一「新式今案の制定」で言及されている。

9　『寛正七年二月四日何人百韻』には第一三句「木々の葉や入江の水に浮ぶらん」（英仲）があり、やはり水辺の体である「入江」と水辺の用である「水」を同時に用いている。

落葉百韻式目表

	句番号・作者	春	夏	秋	冬	恋・衣類	雑(述懐)	旅名所	神祇釈教	山類水辺	居所人倫	動物植物	光物時分	聳物降物	花月
初折・表	1 兼良				冬					水		植			
	2 日明				冬						居・用				
	3 心敬				冬									降	
	4 三位			秋										聳	
	5 隆蓮			秋				旅					光		月
	6 毘親			秋								動(鳥)			
	7 利在			秋						山・体					
	8 円秀			秋										聳	
初折・裏	9 有実	春									居・体			降	
	10 忠英	春										植			
	11 貞興	春													花(梅)
	12 伝芳						雑					動(鳥)			
	13 承成						雑			山・体	人				
	14 立承						述懐								
	15 正頓						述懐		釈						
	16 心敬						述懐								
	17 利在			秋									時・光		月
	18 隆蓮			秋		(恋)									
	19 三位			秋		(恋)									
	20 円秀						雑					植			
	21 伝芳						雑					植			
	22 毘親				冬									降	
二折・表	23 心敬				冬										
	24 日明						雑							聳	
	25 貞興		夏											降	
	26 有実		夏										光	降	
	27 忠英		夏							水・用					
	28 利在						雑	名			居・体				
	29 立承							旅名							
	30 隆蓮					恋衣				水・体					
	31 伝芳					恋									
	32 心敬						雑					植			
	33 三位			秋								植	時		
	34 円秀			秋									光		
	35 毘親			秋		衣									
	36 正頓			秋							居・体			降	
二折・裏	37 心敬						雑・述懐						時	降	
	38 立承	春										植		聳	
	39 日明	春													花
	40 貞興	春										動(鳥)			
	41 三位					恋						動(鳥)			
	42 隆蓮					恋									
	43 有実					恋					人				
	44 毘親			秋									光		月
	45 利在			秋									時	降	
	46 心敬			秋										降	
	47 伝芳						雑					植			
	48 立承		夏							水・用					
	49 忠英		夏			衣									
	50 貞興						雑			山・用・体					

三折・表	51 心敬				冬					山・体		動(鳥)植				
	52 円秀				冬							植		聳降		
	53 利在				冬							植	光時		月	
	54 伝芳						雑			水・体						
	55 隆蓮					恋					人		時			
	56 有実					恋					人・居・体					
	57 心敬	春								山・体	居・体	植			花	
	58 忠英	春						名		山・体						
	59 円秀	春										鳥				
	60 三位						雑・述懐				人					
	61 正頼			秋								植		降		
	62 有実			秋									光時		月	
	63 隆蓮			秋							居・体		時			
	64 毘親			秋						水・用			時			
三折・裏	65 利在					衣	雑			水・用						
	66 心敬					恋										
	67 忠英					恋										
	68 句欠					(恋)										
	69 日明					恋							時			
	70 心敬						雑			山・体		動植				
	71 毘親								釈							
	72 伝芳			秋						水・用					月	
	73 利在			秋						水・体						
	74 立承			秋				名						聳		
	75 隆蓮				冬	衣								降		
	76 円秀				冬						人					
	77 伝芳				冬							植				
	78 有実						雑									
名残折・表	79 立承					恋										
	80 心敬	春				(恋)							光時		月	
	81 伝芳	春														
	82 毘親	春									人					
	83 心敬						雑									
	84 有実						雑						光			
	85 隆蓮		夏								居・体					
	86 利在			秋								植				
	87 三位			秋							居・用	植				
	88 正頼			秋										降		
	89 貞興			秋						山・体		動				
	90 毘親			秋									光時		月	
	91 心敬						雑			水・体・外	人		時			
	92 伝芳						雑			水・用						
名残折・裏	93 円秀						雑				居・体					
	94 三位	春									居・体	動(鳥)				
	95 利在	春										植			花	
	96 伝芳	春												聳		
	97 隆蓮	春								水・用						
	98 忠英			秋						水・体			時		月	
	99 心敬			秋												
	100 日明			秋										降		

外…体用之外

寛正六年正月十六日何人百韻式目表

	句番号・作者	春	夏	秋	冬	恋・衣類	雑(述懐)	旅名所	神祇釈教	山類水辺	居所人倫	動物植物	光物時分	聳物降物	花月
初折・表	1 心敬	春										植			
	2 実中	春										動(鳥)			
	3 行助	春													
	4 元鄰	春												降	
	5 専順	春								山・体	居・体		光	聳	月
	6 幸綱						雑				人				
	7 大況						雑								
	8 宗祇						雑			水・外		植			
折・裏	9 宗怡		夏							水・用					
	10 公範						雑			水・外			時		
	11 心敬			秋		衣	(旅)							聳	
	12 行助			秋							人				
	13 実中			秋									光時		月
	14 専順			秋								動(鳥)			
	15 元鄰			秋										降	
	16 幸綱					恋					人				
	17 宗怡					恋					人				
	18 大況					恋									
	19 宗祇						雑			山・体					
	20 心敬						雑				居・体				
	21 行助	春					(雑)				人				花
	22 専順	春											光	降	
二折・表	23 大況	春												聳	
	24 宗怡			秋						水・用		動(鳥)			
	25 実中						雑			水・体・外					
	26 専順						雑	名		水・外			光	降	
	27 元鄰							旅名		山・体					
	28 心敬			秋								植	光		月
	29 専順			秋					(神)						
	30 行助			秋										聳	
	31 宗祇			秋							居・体				
	32 幸綱						雑			水・体・用					
	33 心敬		夏					名		水・体・用					
	34 行助					衣	雑			水・用					
	35 専順					恋								聳	
	36 元鄰					恋									
二折・裏	37 心敬	春											時		花
	38 行助	春													
	39 専順	春				恋					人				
	40 宗祇			秋						山・体			時		月
	41 大況			秋						居・体		動			
	42 実中			秋											
	43 宗怡			秋		衣	(雑)							降	
	44 元鄰		夏									植		降	
	45 宗祇						雑					植			
	46 専順						雑			山・体				聳	
	47 幸綱						雑			山・体		動(鳥)			
	48 心敬				冬							植			
	49 行助				冬						居・用	植			
	50 実中						雑				居・体				

三折・表	51 元鄰								釈		人				
	52 専順					恋									
	53 幸綱					恋									
	54 行助					恋									
	55 宗祇						雑			水・体・外				降	
	56 大況						雑			水・体・用		植			
	57 心敬						雑	名					光		
	58 専順								釈	水・体					
	59 行助						雑(述懐)				人				
	60 心敬			秋								植		降	
	61 専順			秋											
	62 宗祇			秋		(恋)									
	63 実中			秋		(恋)衣					人				月
	64 心敬						雑				居・用				
三折・裏	65 行助	春									居・体	動(鳥)			
	66 元鄰	春								山・体					
	67 宗祇	春								水・体・外			光		
	68 宗怡	春										植			
	69 実中			秋								植			
	70 心敬			秋										降	
	71 専順			秋							居・体				
	72 専順			秋							居・体		時		
	73 心敬			秋							人				月
	74 行助					恋								聳	
	75 宗祇							旅							
	76 幸綱							旅							
	77 専順	春										植			花
	78 大況	春										植			
名残折・表	79 心敬	春				(恋)									
	80 元鄰	春													
	81 宗祇			秋			(述懐)							降	
	82 宗怡			秋								植	時		
	83 行助			秋				(旅)							月
	84 専順			秋				(旅)							
	85 大況			秋							人				
	86 心敬						雑	名		水・体・用					
	87 元鄰						雑			水・体					
	88 幸綱						雑								
	89 心敬				冬							植			
	90 専順								釈						月
	91 実中								釈						
	92 行助								釈						
名残折・裏	93 専順					恋					人		時		
	94 宗怡						雑					動(鳥)			
	95 利在						雑			水・体		動(鳥)			
	96 宗祇			秋						水・体			時		
	97 大況			秋						水・用					月
	98 実中			秋								植		降	
	99 心敬			秋								植		降	
	100 行助						雑				居・体				

外…体用之外